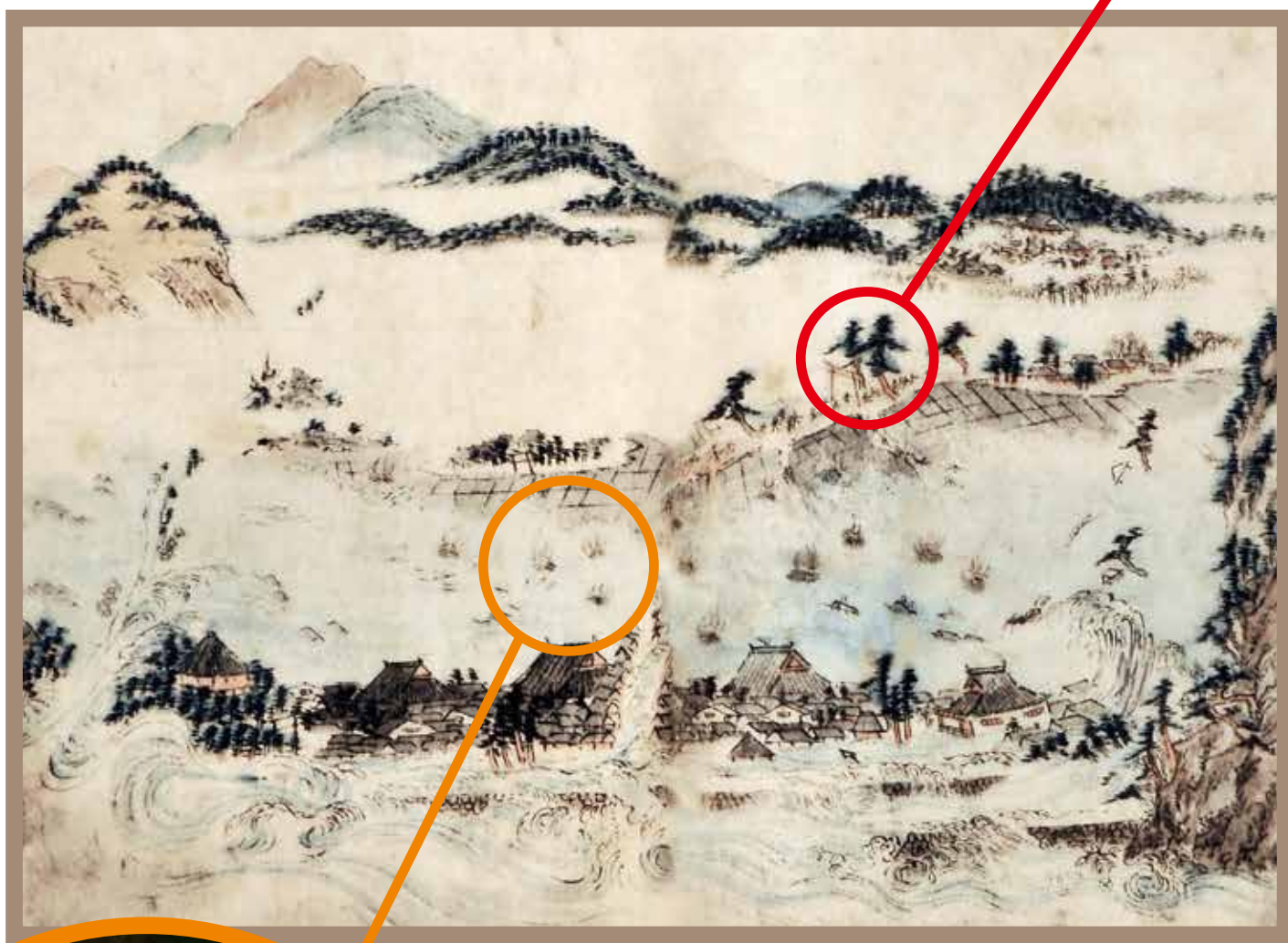


「災害の記憶」を 未来に伝える

— 和歌山県の高校生の皆さんへ —



広八幡神社への
避難訓練



稲むらの火と広八幡神社に避難する人々



燃えさかる稲むら

広川町養源寺に伝わる「安政聞録」(上の絵)には、濱口梧陵(あんせいもん りく)が稲むら(積み上げられた稲わらの束)に火を放って、闇夜のなか津波から逃げ惑う人々を広八幡神社の境内へ導いた様子が描かれています。

写真は、現在おこなわれている稲むらの火祭の様子です。

和歌山県内には、こうした「災害の記憶」を伝える文化遺産が数多く残されてきました。皆さんの住んでいる所や学校の近くにもあるかもしれません。

先人たちは、どのようにして「災害の記憶」を伝えてきたのでしょうか。

この冊子で取り上げる過去の災害

・有史以前

地震の痕跡は、平野の地下にある地層のズレや海岸の生物遺骸などとなって残っていて、活断層や南海トラフなど地震の発生しやすい場所が分かっています。

土砂災害の痕跡は、地すべり地形や崩積土(斜面上から下方へ堆積した土のこと)から読取ることができます。那智山地域では、縄文時代より古い13,800年前の土砂災害の崩積土が見つかっています。

・宝永地震

宝永4年10月4日(1707年10月28日)午後2時頃、静岡県の御前崎沖から四国沖を震源域とする推定M(マグニチュード)8.6の地震と津波が発生しました。有史以来最大級の地震とされ、和歌山県域でも大きな被害があったと想定されていますが、被害の状況を伝える記録はあまり残っていません。

・嘉永元年洪水

嘉永元年8月8日から9日(1848年9月5日から6日)にかけて台風による大雨が降り続き、紀伊半島各地で土砂災害が発生しました。

・嘉永5年洪水

嘉永5年7月20日から21日(1852年9月3から4日)にかけて大風雨となり、北山川や熊野川では洪水が発生しました。

洪水被害の中心が山間部だったこともあってか、記録はほとんど伝わっていません。

・安政地震

嘉永7年(安政元年)11月4日(1854年12月23日)午前9時頃、静岡県沖を震源とする推定M8.4の東海地震と津波が発生し、その32時間後の同年11月5日(12月24日)午後5時頃、紀伊半島沖を震源とする推定M8.4の南海地震と津波が発生しました。

比較的多くの記録が残っており、2つの地震と津波によって、各地で大きな被害が出たことが、わかっています。

・明治11年太地鯨組の海難(背美流れ)

明治11年(1878)12月24日、太地鯨組の人々は子連れのセミクジラを追って出漁しましたが、天候が悪化し、100人を超す漁師が遭難しました。

・明治22年大水害

明治22年(1889)8月18日から20日にかけて四国中部を北上した台風による大雨のため、日高郡・西牟婁郡・東牟婁郡を中心に河川氾濫など大水害となり、流失・倒壊家屋は5,199戸、死者1,247人に上りました。

・昭和東南海・南海地震

昭和19年(1944)12月7日午後1時36分、熊野灘沖を震源域とするM8.0の東南海地震と津波が発生しました。和歌山県域では特に新宮市から那智勝浦町にかけて被害が大きかったといわれていますが、戦時中であったため、被害状況はあまり知らされませんでした。

昭和21年(1946)12月21日午前4時19分に潮岬沖を震源域とするM8.0の南海地震と津波が発生しました。県内では死者・行方不明者269人、建物全壊11,661棟、津波による家屋流失1,451棟に達しました。

・昭和28年水害

昭和28年(1953)7月18日、梅雨前線の活発な活動により、紀伊半島中部山岳地帯で集中豪雨となり、特に有田川・日高川流域で土砂崩れと堤防の決壊が起こりました。和歌山県全体で死者615人、重傷者894人、行方不明者431人、罹災者243,298人、流失又は全壊家屋8,682戸、田畑の流失埋没52,829町歩、被害額は807.1億円にも達しました。

・平成23年紀伊半島大水害

平成23年(2011)9月はじめ、西日本を襲った台風12号によって、死者・行方不明者61人、家屋の全壊・半壊・一部破損・床上浸水・床下浸水合わせて7,933棟の被害が出ました。

はじめに

和歌山県では、古くから大きな地震とそれに伴う津波や、台風・大雨による大規模な土砂災害に幾度もおそわれ、繰り返し甚大な被害を受けてきました。

先人たちは、そのたびに紙や木、石などに記録を残してきました。この冊子では、写真やインターネットのなかった時代に残された「災害の記憶」を紹介しています。

下記のQRコードにアクセスして、身近にある「災害の記憶」を伝える文化遺産を訪ね、先人たちのメッセージを読み解いてみましょう。

Ⅱで紹介する文化遺産が所在する市町村



QRコードにアクセスすると
詳しい場所がわかるワン



和歌山県PR
キャラクター
きいちゃん

はじめに	2
Ⅰ 災害発生メカニズムを知ろう	4
Ⅱ 和歌山県内に残された「災害の記憶」	6
Ⅲ 災害から命と文化遺産を守る	14

「文化財」と「文化遺産」

これまで絵画などの美術品や古文書などは、「文化財」と言われていましたが、近年は「世界文化遺産」のように、「文化遺産」という言葉がよく使われています。

「文化遺産」とは、「地域の歴史を物語る、後世に伝えていくべき大切な文化的所産及び自然の所産」を指し、「文化財」よりも幅広くとらえられるようになりました。

文化遺産は
幅広いんだワン



Ⅱで紹介する文化遺産の一覧

指定 ◎…国指定重要文化財, ○…県指定, □…市町村指定

番号	指定	名 称	所蔵者	関係する場所	関係する災害	ページ
1	◎	水軒堤防	和歌山市	和歌山市西浜	宝永地震	6
2	○	万代日並記(岡本家文書)	個人(県立文書館寄託)	紀美野町福田	安政地震	6
3		花園村災害調査図	和歌山県立文書館	かつらぎ町(旧花園村)	昭和28年水害	6
4	◎	広村堤防	広川町	広川町広	安政地震	7
5	○	大地震津波心得の記	深専寺	湯浅町湯浅	安政地震	7
6		津波之紀事	美浜町浜ノ瀬区	美浜町浜ノ瀬	安政地震	7
7		古今年代記	和歌山県立博物館	日高町比井	宝永地震	8
8	□	明治水害記念碑	日高川町若野区	日高川町若野	明治22年大水害	8
9		津波之由来記録下書	和歌山県立文書館	由良町里	安政地震	8
10		日高川河口絵図(瀬戸家文書)	個人(県立文書館寄託)	御坊市名屋	宝永地震	8
11	□	高波溺死靈魂之墓	印定寺	印南町印南	宝永地震	9
12	□	かめや板壁書置	印南町教育委員会	印南町印南	安政地震	9
13		〔昭和南海地震記念碑〕	各市町村ほか	海南市・田辺市ほか	昭和南海地震	10
14	□	為後鑒	すさみ町山崎区	すさみ町周参見	安政地震	10・14
15	○	津波警告板	白浜町富田区长	白浜町富田	宝永地震	11・14
16		春日神社棟札	白浜町田野井区	白浜町田野井	嘉永元年洪水	11
17	□	天満の天津浪記念碑	那智勝浦町天満区	那智勝浦町天満	昭和東南海地震	11
18		背美流れの控え	個人	太地町太地	明治11年海難	11
19	◎	橋杭岩	串本町	串本町串本	宝永地震	12
20		笠嶋遺跡	串本町	串本町串本	—	12
21		南珠寺旧山門部材	南珠寺(県立博物館寄託)	新宮市佐野	安政地震	12
22		紀州新宮城絵図	和歌山県立博物館	新宮市新宮	宝永地震	13
23		子七月廿一日之夜大風雨洪水二付 本田畑新田畑荒所書上ひかへ	北山村大沼区	北山村大沼	嘉永5年洪水	13

I 災害発生のメカニズムを知ろう

南海トラフの地震

紀伊半島沖の南海トラフ沿いでは、巨大地震がくり返し発生してきました。海洋プレートが大陸プレートの下に沈み込んでいて、それらの境界付近で地震が発生します。

南海トラフ地震の痕跡は、海面付近で生息するヤッコカンザシなどの石灰質遺骸（生物の石灰質の殻や死骸）として残っています。これらの生物遺骸が、現在の海面よりも高い位置で見つかるのです。

地震で大地が隆起すると、海面付近の生物は水がなくなり、生きていけなくなります。これにより隆起した生物遺骸の年代は、地震の年代であるとみなせます。海面よりも高い位置にある石灰質遺骸の年代が、炭素14年代測定法（放射性炭素14Cを用いて年代を測定する方法）で調べられています。

南海トラフの地震は、100～150年サイクルでくり返し発生しているだけでなく、400～600年毎により大きな規模の地震が発生したことがわかっています。



隆起生物遺骸の調査（串本町）



ヤッコカンザシのぬけ殻
（ゴカイの仲間で波打ち際に生息しています）

中央構造線付近の内陸地震

紀の川の北側には、西南日本を地質の異なる内帯と外帯に分ける中央構造線が、東西にのびています。そして中央構造線に沿って、ほぼ平行するか、やや斜交する活断層（中央構造線断層帯）があり、古くから地震を発生させてきました。

地震を発生させた活断層の痕跡は、地形として残るほか、地下を掘る試験的な掘削調査によって、地層のズレなどが調べられています。

紀の川北側の活断層は、7世紀～9世紀に最新の活動があり、地盤が4m程度の右ずれを起こしたとみられます。活断層の活動間隔は、平均でも1,100年～2,300年と幅広く、地震の発生を予知することはとても難しいのです。

中央構造線の位置
（和歌山県立自然博物館特別展解説書『われる！ゆれる！地震のひみつ』から転載）



上 / 根来断層の露頭
現在見ることはできませんが、断層が地表に露出していました。
（岩出市教育委員会提供の写真を加工）

左 / 断層面の交差部

土砂災害とは

大雨や地震などが引き金となって、山やがけが崩れたり、水と混じり合った土や石が川から流れ出たりすること等によって尊い命や財産が脅かされる、自然の災害を土砂災害といいます。主なものとして土石流・地すべり・がけ崩れなどがあります。

土砂災害は予測の難しい災害ですが、いつ発生するかわからない土砂災害から身を守るためには、①普段から土砂災害危険箇所を確認する、②雨が降り始めたら土砂災害警戒情報や雨量に注意する、そして③大雨時や土砂災害警戒情報が発表された際には早めに避難することが大切です。

土石流



山腹、川底の石や土砂が集中豪雨などによって一気に流れ出てくる

地すべり



斜面が地下水の影響と重力によってゆっくりと斜面下方に移動する

がけ崩れ



地面にしみ込んだ水分で弱くなった斜面が雨などで急激に崩れ落ちる

土砂災害の痕跡

古くからくり返し起こってきた地すべりの痕跡は、地形として残っています。航空写真を立体視すると、細かな地形を読み取ることができるので、全国の「地すべり地形」が読み取られて公表されています。

この「地すべり地形分布図」を見ると、地すべり地形が集中しているエリアのあることがわかります。地盤の強さは、どこでも均質・一様ではありません。大地をつくる地質体(岩石や地質構造など)の特性によって、地すべり地形が集中するエリアができています。

昔の土砂災害によってできた土砂が、崩積土となって残っているところもあります。

崩積土の中から木片や炭質物が見つかったら、地すべりの年代を知る手がかりが得られます。炭素14年代測定法で、木片が枯死した年代(注)を知ることができるからです。

那智山付近では、縄文時代より古い13,800年前の土石流による崩積土が見つかっていて、縄文時代に少なくとも5回の土石流が起こったことがわかっています。

(注) 土砂災害が起こる前に、木々が枯死していた可能性もあります。



地すべり地形分布図(防災科学技術研究所)を加工
<http://www.j-shis.bosai.go.jp/map/>



色の塗られた部分が土砂災害のあった場所なんだって！

II 和歌山県内に残された「災害の記憶」

高潮・津波から村を守る！

1. 水軒堤防(和歌山市)



和歌山市西浜にある水軒堤防は、全長2.8キロもあります。高潮や津波被害を防ぐ波除を目的として宝永地震(1707年)から半世紀後の18世紀後半ごろまでに造られました。のちに江戸幕府の将軍となる徳川吉宗が築造にかかわっていたともいわれています。

堤防全体のうち、北側の約1キロは紀の川上流から運ばれてきた土砂が自然に堆積してできたものです。

中央部分(中堤防)の約1キロは、石で覆われていて、とても頑丈に造られていました。発掘調査の成果から、中堤防は、その後の地震による変形や地盤の液状化の痕跡もなく、国内でも有数の土木技術を駆使して築造されたことがわかっています。令和元年(2019)に国史跡に指定されました。



お城の石垣
そっくりだワン



水軒堤防の全景(上)と発掘された中堤防南端部(下)

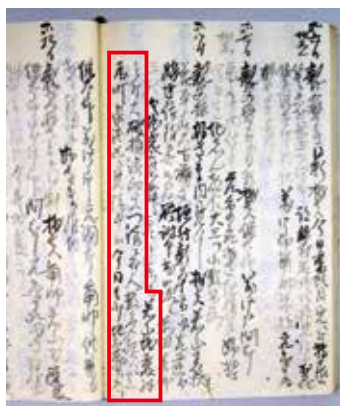
和歌山城下町の地震被害を記す

2. 万代日並記(紀美野町)



紀美野町福田の岡本家では天明6年(1786)から文久3年(1863)までの77年間、親・子・孫の3代にわたって日記を書き残しました。

日記から、岡本家は安政地震(1854年)による被害を受けなかったようですが、後日、お見舞いのため和歌山城下を訪れ、被害の様子を目撃しました。



和歌山へお見舞いに行きました。

【現代語訳】
一(11月)8日(略)和歌山は地震によってことのほか大破損し、浜の方は津波で多くの人が亡くなった。吹上や瓦町(現在の田中町付近)の家は潰れてしまったように見受けられる。今日も小さい地震が4・5回あった。

天然ダムが崩壊

3. 花園村災害調査図(かつらぎ町)



(赤枠部分を拡大)

二八(にっばち)水害と言われる昭和28年(1953)の集中豪雨によって、花園村(かつらぎ町の一部)では土砂崩れが発生し、北寺の集落が丸ごと流されました。この時、崩れた土砂が谷を埋め、天然ダムが形成されました。

さらに9月25日、台風が襲来して大雨となったことから天然ダムが決壊し、再び有田川は氾濫しました。

2度にわたる災害の被害を調査して作成されたのが、右の図です。

ピンク色の部分が土砂崩れの発生した場所です。
有田川が土砂で堰止められ、天然ダムが形成された様子が描かれています。





地震

*日本標識工業会作成



津波



土砂災害



洪水

II

和歌山県内に残された「災害の記憶」

①. 和歌山市

②. 紀美野町

③. かつらぎ町

④. 広川町

⑤. 湯浅町

⑥. 美浜町

堤防は今も現役

ひろむらていぼう

4. 広村堤防(広川町)



安政元年(1854)11月5日の安政地震津波の襲来時、濱口梧陵(1820-1885)は稲むらに火を放ち、この火を目印に村人を広八幡神社へ誘導して多くの命を救いました(表紙の絵)。

この実話をもとにしたのが「稲むらの火」の物語です。

その後梧陵は、将来再び起こりうる津波に備えて高さ5m、天幅2m、根幅20m、長さ600mの大堤防を築きました。堤防建設にあたっては、梧陵らが私費を投じて村人を雇用することで被災民を救済し、津波で荒廃した広村の復興に大きな役割を果たしました。

広村堤防は昭和13年(1938)、国史跡の指定を受けました。梧陵の偉業をたたえるため、毎年10月には「稲むらの火祭」、11月には堤防への「土盛り」と犠牲者の冥福を祈る「津波祭」がおこなわれています。

こうした梧陵の功績が認められ、平成27年(2015)国連総会において11月5日が「世界津波の日」と制定され、同30年(2018)には、「百世の安堵〜津波と復興の記憶が生きる広川の防災遺産〜」として、広川町一帯の関連施設が日本遺産に登録されました。

令和2年(2020)6月15日、生誕200年を迎え、梧陵の功績はますます注目を集めています。



濱口梧陵
(『和歌山県議会議員史』から転載)



現在も防潮堤としての役割を果たしています。

門前を通過して天神山へ逃げろ！

おおじしんつなみころえき

5. 大地震津波心得の記(湯浅町)



醤油の香ばしいにおいが漂う、湯浅町の伝統的建造物群保存地区(伝建地区)の近くに深専寺はあります。

門前には、安政地震津波(1854年)による被害を踏まえて「津波の前に井戸の水は減りも濁りもしなかったこと」や、「大地震があつたら火の用心をして浜辺や川筋へ逃げずに山の方へ逃げることを」を後世の人々に伝えるため、石碑が建てられました。



門前に建っているので、いつでも見ることができます。



船に乗って逃げてはいけない

つなみのきじ

6. 津波之紀事(美浜町)



安政地震津波(1854年)の発生から8年後に、藤井村(御坊市藤田町藤井)の瀬戸佐一郎が浜ノ瀬浦に建てた津波記念碑です。江戸時代、この場所は恵美須神社の敷地でした。石碑には、「大松原(煙樹ヶ浜)」の小高い場所へ逃げるように(略)船などで逃げようとしてはいけない」と記されています。

御坊市園にある浄国寺には、津波によって浜ノ瀬浦で13軒が流失し、小船に乗って逃げた住人12人が亡くなった、という記録が残っています。



現在は、美浜町公民館浜ノ瀬分館にあります。

II 和歌山県内に残された「災害の記憶」

寺の門まで津波がきました

7. 古今年代記(日高町)



比井浦(日高町比井)で廻船業を営んだ村上家に伝えられてきた「古今年代記」によると、宝永地震(1707年)による津波が若一王子神社の段橋3段目まで、長覚寺の屋敷門口まで到達したと記されています。

長覚寺に残された記録から、この時津波で流された家が50軒余り、潰れた家と合わせると93軒にのぼったことがわかっています。

しかし、翌年には長覚寺本堂の屋根の葺き替えが行われており、着実に復興の歩みを進めていました。



ハザードマップと照らし合わせてみよう。

人家は高い所に建てるべし！

8. 明治水害記念碑(日高川町)



右の写真は、明治22年(1889)の水害から16年後、矢田村若野(日高川町若野)の高台に建てられた石碑です。

石碑には、大雨により日高川が決壊し、被害は日高郡全体におよび、特に若野村の被害が最も大きく、流失した家屋が37戸、死者は37人にのぼったことが記されています。

この被害を教訓として、人々は石碑に後世への警鐘を刻み、また家屋を丘の上へ建てるようになりました。



いまでも供養が続けられています。

山のような大津波

9. 津波之由来記録下書(由良町)



由良町の個人宅に伝わった、安政南海地震(1854年)後に津波被害を記した古文書です。

この記録によると、横浜村(由良町里)の低い所で約4.5m、宇佐八幡神社付近では、本殿前石段の6段目まで、山のような津波が押し寄せたということです。

津波は由良川をさかのぼって、現在の入路交差点付近から里集会所あたりまで到達しました。



津波は7回きた、と記されています。



宇佐八幡神社
石段は当時と異なります。

消えた堤防

10. 日高川河口絵図(御坊市)



日高川河口の名屋浦(御坊市名屋および名屋町一〜三丁目)周辺の絵図で、天保3年(1832)に作成されました。宝永地震津波(1707年)の6年後に完成したとされる「波除堤」と呼ばれる防波堤(赤線部分)が描かれています。

現在、堤(赤い点線部分)は跡形もなくなっていますが、江戸時代の防災対策を知るうえで貴重な記録といえるでしょう。



「波除堤」を赤線で示しました。



2019年撮影の空中写真
(地理院地図を加工)



地震

*日本標識工業会作成



津波



土砂災害



洪水

II

和歌山県内に残された「災害の記憶」

7. 日高町

8. 日高川町

9. 由良町

10. 御坊市

11. 12. 印南町

津波で亡くなった人々のお墓

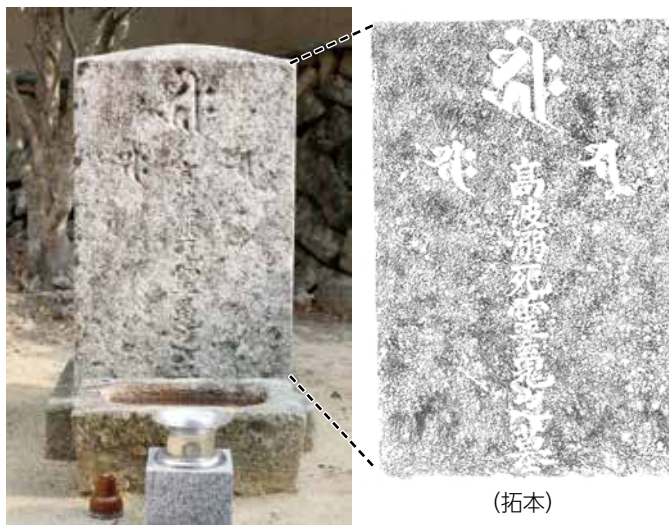
11. 高波溺死靈魂之墓(印南町)



印南町印南の印定寺^{いんじょうじ}には、宝永地震津波(1707年)で亡くなった人々を供養するとともに、津波の記憶を後世に伝えるために、13回忌にあたる享保4年(1719)に建てられた、高波溺死靈魂之墓^{たかなみでし れいこんの はか}と高波溺死靈名合同位牌^{いんじょうし}が残されています。

47年後に安政地震津波が発生した際、印南での犠牲者がゼロだったのは、この高波溺死靈魂之墓が災害の記憶を伝えていたからではないでしょうか。

平成26年(2014)、印定寺山門前に伝承板(解説板)が設置されました。石碑などに刻まれた記憶を、改めて見直そうとする取り組みが実を結び、令和2年(2020)、かめや板壁書置とともに町指定文化財となりました。



(拓本)

墓の四面には、犠牲者の人数や津波の到達点などが刻まれています。肉眼では読み取りにくいので、拓本(魚拓のようなもの)をとりました。

壁だけを切り取って残しました

12. かめや板壁書置(印南町)



近年、大規模災害によって被災した建物などを震災遺構、あるいは震災遺産といって将来に伝える動きがあります。

印南川河口に暮らしていた亀屋弥兵衛^{かめや やへえ}の蔵も安政地震津波(1854年)の震災遺構です。蔵は地震・津波による被害を受けましたが、奇跡的に流失を免れました。そのため弥兵衛は、蔵の内側の板壁に①大地震と大津波が周期的に起こること、②大地震・大津波の前には予兆があること、③地震が起こったら高い所へ逃げなさい、④大地震や大津波がまた来たときは死者が出るだろう、と書き置きました。

この蔵は、昭和南海地震による津波でも流されることはありませんでしたが、その後何度か取り壊しの危機が訪れました。しかし、弥兵衛が「災害の記憶」を残した板壁だけは、郷土史家や地域住民の皆さんの理解と協力のもと保存されることになり、現在はいなみっ子交流センターで保管・展示されています。



周囲の家屋は津波で流されましたが、弥兵衛の蔵だけが残りました。



印南町内の「災害の記憶」に関する場所

みんなで守ってきたんだワン!



II 和歌山県内に残された「災害の記憶」

2019年に新登場した地図記号「自然災害伝承碑」

13. 昭和南海地震と県内に建てられた記念碑



昭和南海地震（1946）の発生後、県内では多くの記念碑が建立されました。

「災害の記憶」に関する文化遺産は、その内容によって①犠牲者の供養、②後世の人々への警告、③津波到達点や水位など被災の具体的な情報、④災害復興の記念、という4つのタイプに分けられます。昭和南海地震による記念碑に、③津波到達点や水位を示すものが多数を占めるのは、宝永や安政のときに比べて津波による犠牲者が少なかったからでしょう。

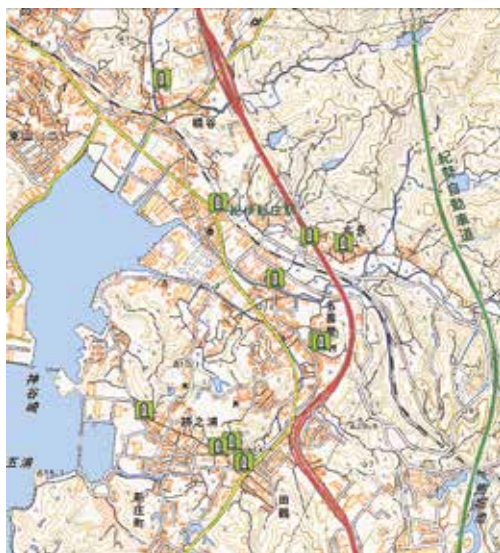
和歌山県内では、地震津波に関する記念碑が58基確認されており、その内訳は宝永地震8基、安政地震津波14基、昭和地震津波41基となっています（一つの碑に複数の災害の記憶が刻まれている場合があります）。

令和元年（2019）、国土地理院は、災害の教訓を正しく知り、災害による被害の軽減に貢献するため、新たに「自然災害伝承碑」の地図記号を制定しました。和歌山県内では、田辺市新庄町をはじめ、和歌山市及び印南町に所在する碑が掲載されています。



地図記号
「自然災害伝承碑」

たくさん
あるワン



田辺市新庄町の「自然災害伝承碑」
(WEB版「地理院地図」を加工、令和2年1月25日現在)

県内で確認されている昭和地震津波記念碑

		場所	記念碑の名称
1	海南市	海南駅前広場	南海道地震津波浸水水位
2	由良町	中央公民館	由良町中央公民館標石
3	田辺市芳養町	大神社の向かい	南海道地震津波潮位標識
4	田辺市 新庄町	山祇神社階段脇	南海大地震津浪潮位標
5		新庄駅前	
6		JA紀南新庄支所近く	
7		跡之浦児童公園敷地内	
8		内之浦公民館敷地内	
9		北長町内会館の近く	
10		跡之浦会館前	南海道地震津波潮位
11	白浜町	内之浦干潟親水公園内	津波潮位モニュメント
12		東光寺敷地内	津浪之碑
13		東光寺敷地内	南海大地震津浪遭難者供養像
14		網不知共同墓地	岩城惣八夫妻の墓
15	白浜町	網不知地蔵堂境内	南無阿弥陀仏
16		網不知公園内	大津波犠牲者供養塔
17		細野会館正面脇	南海道地震による津波の潮位
18		才野会館正面脇	
19		国道42号沿い、交番・消防倉庫横	
20	すさみ町	立ヶ谷会館敷地内	津浪乃碑
21	串本町	萬福寺	昭和南海地震津波到達標柱
22		橋杭のJRきのくに線ガード下	
23		サンナンランド大水槽踏切前町道	
24		矢の熊の土木所長官舎	
25		堀の元警察官舎町所有地	
26		南地区新町通り南側	
27		袋バス停前串本財産区所有地	
28		袋の石切地蔵前	
29		にしき園踏切入口	
30		二色町宮住宅入口	
31		高富の釜郷原防火水槽付近	
32		大山入口、JRきのくに線有田駅下が	
33		田並門光寺石垣附近	
34		江田告示板横	
35		田子区民会館敷地内	
36		安指区民館玄関前	
37		和深公民館玄関前	
38		大島の駐車場(私有地)	
39		大島漁協上町道	
40	須賀浦集会所西側	吉村宮一組合長「記念碑」	
41	那智勝浦町	天満神社境内鳥居の横	大津波記念の碑

仏さまのもとへ集まれ！

のちのかがみのため

14. 為後鑒(すさみ町)



安政地震津波（1854年）の2年余り後、安政4年（1857）に建てられた津波記念碑です。津波が襲来する前に、この碑の建つ大日山（すさみ町周参見字山崎）へ避難した村人が、大日如来の御加護と信仰によって難を逃れることができたことを記念して建てられました。

昔は1月28日の大日講という行事とあわせて、碑の立つ高台の広場へ区長が先頭で小太鼓を鳴らし、後に続く人たちは掛け声をだしながら登っていました。

毎年行う大日講の行事が、同時に夜間の津波来襲を想定し、音を頼りに広場へ登る、避難訓練でもあったのです。令和2年（2020）町指定文化財になりました。



現在も津波避難目標地点となっています。



地震

*日本標識工業会作成



津波



土砂災害



洪水

避難訓練の時に読みあげます

15. 津波警告板(白浜町)



草堂寺の住職であった松岩令貞によって、宝永地震津波(1707年)の被害について記された津波警告板と呼ばれる板が白浜町富田の飛鳥神社に伝わっています。

この板には、「はだしですぐに小倉山や飛鳥山に逃げ登り、命が助かった人々がいた」一方で、「家財に執着して百数十人が命を失った」とも記されています。

昭和37年(1962)に再発見されるまで長らく忘れ去られていましたが、近年、祭礼を兼ねた避難訓練で読みあげられ(p.14)、過去の「災害の記憶」をよみがえらせる手がかりとなっています。



大事なもので、複製を作りました。

みんなで再建

16. 春日神社棟札(白浜町)



日置川のほとりに建つ春日神社(白浜町田野井)に伝わる、安政2年(1855)の棟札には、洪水と地震の記憶が書かれています。

「嘉永元年(1848年)の大洪水によって村中残らず被害を受け、この御宮も内陣まで浸水した。傷みがひどかったうえ、安政の大地震(1854年)によってすっかり壊れてしまったが、氏子中で申合せて再建することとし、安政2年5月に建て初め、同11月1日に完成した。」春日神社が村の大事な守り神として敬われていたことがわかります。



裏側に洪水と地震のことが書かれています。

那智中学校の正門門柱を記念碑に転用

17. 天満の大津浪記念碑(那智勝浦町)



以下は、那智勝浦町天満天神社の敷地内に建てられた碑に記された内容です。

「昭和19年(1944)、突然大地の底をえぐる怪しい音が起こり、息をのんだ次の瞬間、にわかに起こったむごたらしい状況、天も地も崩れるような大地震に襲われた。(略)津波が来て、錦の浦の海を傾け、なだれのようにやって来る。(略)天満・須崎・高岸の集落にまっしぐらに進む。ああ、先祖が誇った田畑がだめになり、117軒が家を失う。親子が捜し合う間もなく、9人の尊い命が海の藻くずの下に消え去ったのは悲しいことだ。昭和21年(1946)も同じ災難(南海地震)があったが、地震発生から時間がたてば、人の記憶も薄れていくので、碑を建てて、過去を思い起こさせることにする。中森亮順が書き記す」



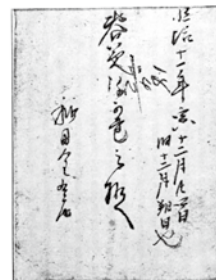
高さが3メートル近くあります。

日本最大級の日難事故

18. 背美流れの控え(太地町)

明治11年(1878)12月24日、セミクジラを捕まえに出た船団が暴風雨により遭難しました。この海難事故は「背美流れ」と呼ばれています。

太地小学校6年生児童は、毎年冬の晴れた日に、熊野灘を一望できる妙法山の見晴台を訪ね、太地燈明崎山見の責任者であった和田金右衛門頼芳が書き残した「背美流れの控え」から、海難事故について学んでいます。



「背美流れの控え」
(『熊野太地浦捕鯨乃話』から転載)



『鯨種類并に異形巻物』(太地町立くじらの博物館蔵)に描かれたセミクジラ

災害が原因で
海難事故がおきたんだね



II

和歌山県内に残された「災害の記憶」

(13. 海南市・田辺市ほか

14. すさみ町

15・16. 白浜町

17. 那智勝浦町

18. 太地町

II 和歌山県内に残された「災害の記憶」

ダイナミックな地球の活動

19. 橋杭岩・津波石と南紀熊野ジオパーク(串本町)



串本町にある国指定名勝かつ国指定天然記念物である橋杭岩周辺には、多くの石が散らばっています。これらの石は過去の津波の痕跡を示す津波石として知られています。これらの石のほとんどは橋杭岩と同じ石から出来ていますので、おそらく過去の地震や津波のたびに橋杭岩から崩落してきたものでしょう。



橋杭岩から崩れた石が、津波によって運ばれました。

大型の台風時には高波が来襲しますが、多くの石は動かないようです。石に付着している生物遺骸の年代測定によると、巨大津波が来襲した時だけ動いていることがわかってきています。

最新の研究では、12～14世紀と17～18世紀に大きな津波があった可能性が考えられています。とくに、17～18世紀の大きな津波は、宝永地震(1707年)に伴う津波の可能性が高いようです。古文書や石碑だけではなく、津波石も「災害の記憶」を残しています。

橋杭岩をはじめとした南紀熊野ジオパークは、紀伊半島南部の大地のなりたちを知るだけでなく、歴史・文化・動植物・食を通じて、大地と人との関わりを実感して楽しむところです。プレートの沈み込みで生み出された3種類の大地が同じエリアでみられる日本でもたいへん貴重な場所です。

津波で消えた1800年前の集落

20. 笠嶋遺跡(串本町)



串本町串本の笠嶋遺跡は、現在の県立串本古座高等学校及び町立串本中学校を含む範囲にある、弥生時代の海浜集落跡です。

しかし、約1,800年前の弥生時代終末期に、その集落が一瞬にして崩壊したことが発掘調査によって明らかになりました。

笠嶋遺跡で大量の遺物を埋めた砂礫層は、近年の地質調査の成果と合わせて、津波によってもたらされたものと考えられます。

また、同じころ、南海地震の特徴の一つである潮岬の隆起が確認されていることから、津波をもたらしたこの地震が南海トラフ沿いで起こった大地震であると考えられます。



津波によって同じ方向に倒れました。
(写真提供 同志社大学歴史資料館)

笠嶋遺跡は、まさに約1,800年前の南海トラフの地震とそれに伴う津波による被災状況を私たちに示してくれるものでしょう。

津波漂流木の再利用

21. 南珠寺旧山門部材(新宮市)



安政5年(1858)8月17日、新宮市佐野にある南珠寺の山門(入口の門)が完成しました。

この門は、安政地震(1854年)によって大きな被害を受けたので、建て直していたのです。

お寺の言い伝えでは、山門を再建する時に、津波で流されてきたケヤキの木を用いた、とされています。

その証拠か、門の部材の一つに、地震によって津波が発生したことが書かれていますが、佐野では大きな被害がなかったせいか、詳しいことは書かれていません。

現在の山門は、平成11年(1999)に新しく建てられましたが、津波のことを記録した旧部材は大切に残されています。



部材の裏側に書かれていました。



地震

*日本標識工業会作成



津波



土砂災害



洪水

II

和歌山県内に残された「災害の記憶」(19・20・串本町 21・22・新宮市 23・北山村)

新宮城の石垣も地震で崩落

22. 紀州新宮城絵図(新宮市)



宝永地震津波(1707年)によって、新宮は大きな被害を受けました。「熊野年代記」という古文書には、「熊野で大地震があり、町屋・村方の家が悉く崩れ、死者もでた。浦々では津波で家が流された。(中略)新宮の町中の人は「神前芝ノ内」(熊野速玉大社の境内か?)に仮住まいをしたが、前代未聞のことだ。揺れは24日間(別の本では7日間)続いた。(中略)。地震後、汐は以前よりも5~6丁(500~600m)ほど内陸まで入ってきた。地面が下がったためであろうか。」と記されています。

この時、新宮城の石垣も崩れています。下の絵図には崩れた石垣の場所が示されています。



積み直された石垣

写真の場所へ
行ってみるワン



赤い線の部分の石垣が崩れました。積み直された石垣(右上写真)が現在も残っています。

大切な田畑にも被害が

23. 子七月廿一日之夜大風雨洪水二付本田畑

新田畑荒所書上ひかへ(北山村)



嘉永5年7月20日(1852年9月3日)、大雨によって北山川で洪水が発生しました。

そのため大沼村(北山村大沼)では人家が流出、11人ほどの命が失われ、村の田畑も旧北山小学校周辺を中心に被害を受けました。

被害を受けた田畑の面積などを記したのが、右の長い名前がつけられた古文書です。

大沼区では、地域に関わる古文書を区の財産として大切に守り伝えています。過去の災害を含む地域の歴史を知ることができるのは、記録を伝えてきた先人たちの知恵と努力のおかげ、といえるでしょう。



田畑が土砂だらけになりました。

先人たちは「災害の記憶」を色んな方法で伝えようとしたんだワン



Ⅲ 災害から命と文化遺産を守る

和歌山県の防災対策

「災害による犠牲者ゼロ」の実現に向け、県危機管理局では、「出張！減災教室」等の出前講座を通じて、県民の皆さんの防災意識向上と家具固定をはじめとする家庭での防災対策を推進しています。

また、県HP「防災わかやま」やスマートフォン用アプリ「和歌山県防災ナビ」、Twitterなど様々な方法での情報発信を行い、災害発生時の的確な避難を支援しています。



地震体験車「ごりょうくん」



和歌山県防災ナビ

文化遺産と避難訓練（すさみ町・白浜町）

のちのかぎのため

為後鑿（p.10）は、避難場所の目標となっています。

津波警告板（p.11）は、毎年祭礼とともにおこなわれる避難訓練で読みあげられ、現在も活用されています。

この冊子で掲載している文化遺産のほかにも、多くの「災害の記憶」を伝える文化遺産があります。過去の災害の記録をひもとき、防災・減災に役立てましょう。



すさみ町ハザードマップ
（Web版を加工）



「津波警告板」を読み上げる区長
（写真提供 蘇理剛志氏）

紀伊半島大水害と文化財レスキュー

平成23年（2011）9月の紀伊半島大水害では、文化遺産も被害を受けました。水に濡れた文化遺産（特に紙）は、カビと腐敗が急速に進むからです。

被災した文化遺産に対して、和歌山大学紀州経済史文化史研究所とボランティア団体である歴史資料保全ネット・わかやまが中心となって、被災地での消毒・救出、預かった資料の洗浄・乾燥・泥落としなどの「文化財レスキュー」活動をおこないました。

その結果、文化遺産の一部を救出・保全することができました。



泥落としの様子

「災害の記憶」を継承する取り組み

和歌山県では、災害から文化遺産を守り、未来へ伝えていくために、県立博物館、県教育庁文化遺産課、県立文書館が協力し、過去の災害に関する「災害の記憶」の調査をおこなっています。

「災害の記憶」については、和歌山県立博物館HPで「県内に所在する災害記念碑一覧」及び、小冊子『先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝える』Ⅰ～Ⅴを公開しています。ぜひ、ご覧ください。

<https://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp/>



これまでに刊行した小冊子

地域の文化遺産を継承する施設

国宝や重要文化財はもちろん、地域で保存されている古文書や絵図、仏像をはじめ、農具や漁具に代表される民具や卒業証書、写真なども人々が地域で生きた証を伝える、貴重な文化遺産です。

皆さんの地域にある博物館や資料館へ、足を運んでみませんか。



有田市郷土資料館



ゆらふるさと伝承館内の展示風景



旧由良町立白崎中学校

ゆらふるさと伝承館は、旧由良町立白崎中学校の校舎の一部が使われています。

この冊子に関連する施設

名称	住所	電話番号	休館日
和歌山県立博物館	和歌山市吹上1-4-14	073-436-8670	月曜日(祝日の場合その翌平日) 年末年始、展示替え期間など
和歌山県立文書館	和歌山市西高松1-7-38	073-436-9540	月曜日(祝日の場合その翌平日) 年末年始、特別整理期間
和歌山県土砂災害啓発センター	東牟婁郡那智勝浦町 市野々3027-6	0735-29-7531	年末年始
南紀熊野ジオパークセンター	串本町潮岬2838-3	073-441-2690	年末年始
有田市郷土資料館	有田市箕島27 (有田市文化福祉センター4階)	0737-82-3221	水曜、年末年始等
稲むらの火の館	有田郡広川町広671	0737-64-1760	月曜日(祝日の場合その翌平日)、年末年始 ※11月5日世界津波の日は開館
いなみっ子交流センター	印南町印南1986	0738-42-1170	※見学の際は事前に電話連絡要
ゆらふるさと伝承館	日高郡由良町神谷213 (旧白崎中学校2階)	0738-65-1800	土日祝日、年末年始 ※見学の際は事前に電話連絡要
太地町立くじらの博物館	太地町太地2934-2	0735-59-2400	年中無休

執筆者 後誠介、菅野悠斗、砂川佳子、藤隆宏、浜田拓志、福村成哉、本郷宙軌、前田正明、松原瑞枝、森川智

協力者 JR西日本新宮エリア会、印南中学校、貴志川高校、耐久高校、日高高校、串本古座高校、和歌山県危機管理・消防課、同砂防課、和歌山県立文書館、南紀熊野ジオパークセンター、和歌山県教育庁文化遺産課、同健康体育課

このほか、ご協力いただいた個人の方々のお名前については、紙面の都合で掲載することはできませんでした。この場を借りて、お礼申し上げます。

*この冊子は、『平成31年度文化庁地域と共働した博物館創造活動支援事業(博物館を中心とした文化クラスター形成支援事業)』に基づき、和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会が実施した「地域に眠る『災害の記憶』と文化遺産を発掘・共有・継承する事業」の成果です。

*冊子制作にあたり、拓本採取は元興寺文化財研究所に、ドローン撮影は長岡写真事務所に業務委託しました。

*和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会は、和歌山県立博物館、和歌山県立和歌山工業高等学校、和歌山県立近代美術館、和歌山県立紀伊風土記の丘、和歌山県立自然博物館、歴史資料保全ネット・わかやまで構成されています。

「災害の記憶」を未来に伝える - 和歌山県の高校生の皆さんへ -

発行日/令和2年(2020)3月11日

編集/和歌山県立博物館

発行/和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会(委員長 伊東史朗)

〒640-8137 和歌山市吹上一丁目4番14号 和歌山県立博物館内

印刷/中和印刷紙器株式会社

高校生防災スクール

和歌山県では、「中学生・高校生の防災意識を高め、地域防災の担い手として社会貢献できる青少年の育成」を目的として、防災ハンドブックの配布と高校生防災スクールを実施しています。

学校によって防災スクールのメニューは様々ですが、沿岸部であれば、地震・津波、山間部においては土砂災害など、地域の実態に即した訓練を行っています。沿岸部の学校では、JR西日本と連携し、列車乗車中の地震と津波の発生を想定した避難訓練なども定期的に行うことで、いかなる時も適切な行動を取れるよう目指しています。



防災ハンドブック



JR西日本新宮エリア会主催による
列車乗車中の避難訓練
(串本古座高校)



HUG(避難所運営ゲーム)
(貴志川高校)



避難所でのパーティション設営
(日高高校)

ICOM (国際博物館会議)

令和元年(2019)9月1日～7日、ICOM(国際博物館会議)京都大会が開催されました。

9月5日和歌山県では、メイン会場である京都を離れたオフサイトミーティングとして、CECA(教育・文化活動国際委員会)の会議が行われ、大会参加者4,590人のうち、約90人の博物館職員や研究者を迎えました。専門家を招いたランチタイムセッションでは、『世界津波の日』2018高校生サミットin和歌山の取り組みが、県立串本古座高校及び耐久高校の生徒の皆さんによって英語で発表されました。

耐久高校からは、濱口梧陵と「稲むらの火」のエピソードが紹介され、和歌山県が「世界津波の日」発祥の地であることを伝えることができました。

県立博物館においても、印南中学校の皆さんが発表し、博物館と学校や地域が連携して、過去の災害から得られた情報や教訓を地元伝える取り組みを、世界に向けて発信しました。



串本古座高校生徒による発表



耐久高校生徒による発表

● まとめ ●

「災害の記憶」には、右の4タイプのメッセージの
あることがわかりました。

先人たちは、「災害の記憶」を伝えることによって、将来おこるかもしれない災害から、子孫や地域の人々の生命と財産を守りたかったのではないのでしょうか。

和歌山県の高校生の皆さんが、「災害の記憶」に学んで自分の命を守り、また、地域の文化遺産の守り手となることを願っています。

「災害の記憶」に 込められたメッセージ

- ①犠牲者の供養
- ②後世の人々への警告
- ③被災の情報
- ④災害復興の記念

「災害の記憶」を
未来に伝えよう

